中高生とともに差別と闘う

放っておいてくれ！

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

放っておいてくれ！

大谷選手が結婚を発表しました。なぜ発表をしたのか？

みんながうるさいから

その通り！本当にその通りだと思いました。私なら、放っておいてくれ！と言いたいくらいですし、自分のことでなくても、放っておいてあげて、と思ってしまいます。

あれだけの大物になってしまえば、結婚はどうするんだろう？うるさくなるんだろうな…とは思っていました。でも、そのことと野球選手としての活躍に注目するのとは別物です。なのに、なぜにそんなことを思ってしまうのか。あれだけの世界的なビッグプレーヤーになってしまうと、さぞかしパートナーも大変だろう、といった、同情のような、憐れみのような気持ちで気になるのかもしれません。でも、そう思うならなおさら放っておいてくれ！です。

そもそも、女性が恋愛対象とは限らないはずです。なのに、どうして「彼女」と決めつけられなければならないのか。「恋愛や結婚に関心がない」という選択肢だってあるわけです。多くの人が、自分の価値観、価値基準で人を見てしまいがちですが、人は多様ですから、自分の価値観ではかれるとは限らないわけですよね。これだけ性の多様性が叫ばれている現代なら、当たり前に受け止められてもいいように思うのですが、結局のところ、まだまだ「自分事」になっていないことの現れなのかもしれません。もう少し、日本人、日本の報道、「自分事」にならないものでしょうか。

「のみ」の重み

前週、教え子の結婚式に行ってきました。ステキな結婚式でした。「家と家」ではなく、「個と個」のつながりや思いを大切にした結婚式だったように思います。

三十年近く前、自身の結婚式のとき、この「家と家」の結婚式が嫌で嫌で、式場担当の方に一つ一つ注文をつけたものです。ダメ出しされるかな、と思いつつ相談をすると、「いいですよ」と、ニコニコ笑顔で快諾していただけました。他にも、元号を廃するとか、平服での参加とか、仲人を立てないとか。結婚式の招待状には、「日本国憲法第二四条を可能なかぎり誠実に守っていく誓いとして本披露宴を…」との言葉に、二人の名前を添えました。

憲法第二四条「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」

部落差別にかかわって、結婚差別のリアルな話を聞く機会が、本当にたくさんありました。ですから余計に、「両性の合意のみ」の、「のみ」に重みを感じていました。なくても成立する一文です。にもかかわらず、敢えてこの二文字を入れることの意味。そこに、二四条の奥深さを感じるのです。

多様な価値観

今、これを書いているのは、三月三日。この日は、私たちの結婚記念日です。そしてこの日は、部落の完全解放を謳い立ち上げた水平社創立記念日でもあります。

今考えると私たちの結婚式、まだまだ変えるべきことはあったかと思いますが、それが当時の私たちの精一杯でした。

そもそも結婚するについて私の両親は、「部落の人だけはやめて」と言うぐらい、差別意識の強い人でした。ありとあらゆる「しきたり」や「習わし」に、いちいちこだわりを主張していました。それに対し私は猛烈に反発し、言い争ってきました。結婚を初めて告げたときも、母は私にこう問いました。

「どこの人？」「何をしてる人？」

それまでいい加減差別問題について議論してきたにもかかわらず、まだそれを訊くか、という思いで、私はつっけんどんに返します。

「女性。何をしてるかは関係ない」

もう少し大谷選手みたいにソフトに返せばよかったのかもしれませんが、当時の私にはまだ無理でした。

同じころ、全国どこも同じような状況だったかというと、そうではなかったと思います。私よりも前に札幌で結婚をした友人は、会費制の結婚式でしたから、おそらく地方によって偏りはあるのだと思います。もしかすると、場所によっては今も、人権への配慮に欠けるような場面もあるかもしれません。それも、多様性と言えばそうですが、要は固定観念に縛られるのではなく、多様性が許されるような式であるかどうかだと思います。

ライフスタイルが変わる

先日、同性カップルの結婚を式場が引き受けてくれないという記事を見ました。「この時代にまだ！」と、ア然としました。ということは、私の結婚のときに感じた担当者とは異なる、旧態依然とした考えも、ブライダル業界のなかにあるということ。とはいえ、昨年呼んでいただいた教え子の結婚式もステキな結婚式で、私のときには当たり前だった上司からのスピーチもありませんでした。さらに今回の式では、スピーチも友人代表のみでした。

本当に呼びたい人を呼ぶ。聞きたい人のスピーチだけにする。自分たちにとっても、招かれた人たちにとっても、本当に気持ちのいい式。こんなふうに、人の人権意識によって、結婚式も多様になっていくのだと思います。それは特別なことではなく、ごくごく当たり前の、自然な、誰にとってもやさしい「お祝いごと」になっていくということです。

イラスト　中島　亜唯